

A photograph of a person in a sled, pulled by a team of sled dogs, traversing a snowy, icy landscape. The person is wearing dark clothing and a fur hat, and is holding a long stick. The sled dogs are of various breeds, including huskies and malamutes, and are harnessed together. The background is a vast, open, snowy field under a bright sky.

北極点 グリーンランド 単独行 植村直己

文春文庫



文春文庫

178—4

北極点グリーンランド単独行

定価はカバーに
表示してあります

1982年 8 月25日 第1刷

1988年 9 月15日 第7刷

著 者 植村直己

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3 - 23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁・乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-717804-4

文 春 文 庫

北極点グリーンランド単独行

植 村 直 己



文 藝 春 秋

目次

北極点へ

白熊の来襲

大乱氷帯

北極圏の太陽

ハスキー犬の出産

氷島からの脱出

地球の頂点に立つ

7 26 43 64 82 107

グリーンランド縦断

蜃気楼の冰山

アカデミー氷河登攀

櫓に帆かけて

氷床上のトレース

ブリザードの下で

スナタックの朝焼け

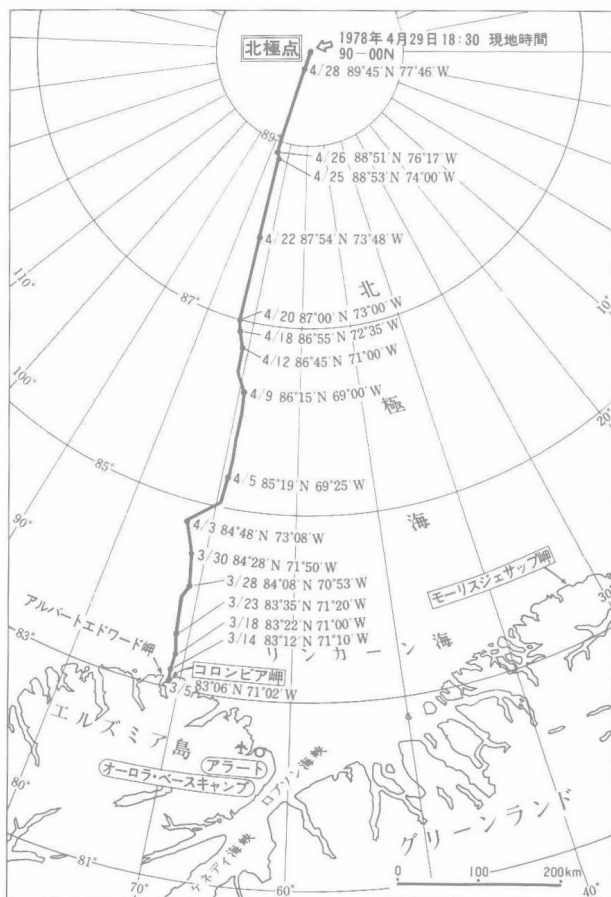
あとがき 全装備リスト

133 158 183 203 221 238

写真 植村直己・安藤幹久
地図 高野橋康

北極点へ





白熊の来襲

一九七八年三月五日

午後三時（リソリュート時間）、私をここまで連れてきてくれた飛行機は、東へ飛び去っていった。私と十七頭の犬たちだけが、北極点への旅の出発点に残された。北緯八三度六分、西経七一度〇二分、コロンビア岬の海岸の氷上である。

寒い。猛烈に寒い。極地用寒暖計はマイナス五十一度を示している。パークカーのフードを縁どっている狼の毛が、吐く息でたちまち凍りついてしまう。半年ぶりに戻ってきつつある北極圏の太陽は、まだ姿を見せていないが、水平線のすぐ近くにあるらしく、あたりは日没直後のような薄明の中にある。

私はようやくここに舞い戻ってきたのだ。きびしく、そして奇妙になつかしい、この氷と寒気の世界へ、たった一人で帰ってきたのだ。私だけの自然との格闘がこれから始まる。全身が緊張し、心が押えようもなく昂ぶってくる。思わず知らず、置かれた櫓こしや荷物のまわりを歩いてみる。

キーン、キーンという鋭い音が、私の前後にも左右にもひびく。すさまじい低温で堅くなった雪の上に歩を運ぶと、雪面に亀裂が走り、そのとき、三十メートルほど離れたあたりで、この奇妙な音が発生するのだ。たとえその正体がわかっていても、動物の鳴き声のようにも聞えるこの音は、私を立ち止まらせる。静まりかえった氷と雪のなかで、この音は正体不明の不安をかきたてるのだ。

前回の一万二千キロの犬橇旅行でもそうだったが、旅の出発には、いつもどこから湧いてくるかわからぬ不安感が心のなかに生れ、私を苦しめた。いまでも、またそうなのだ。闘志をかきたて、全身をひきしめているつもりなのに、漠然とした不安がときおり心を横切る。そして、これをふり払うには、実際に行動を起すほかにないことを、私は知っている。

まず、私がやらなければならないことは、ルートを偵察することだ。

コロンビア岬からなだらかに海に落ちこんでいる氷のスロープは、海岸から百メートルほど離れると、一転して荒々しい氷のブロックの積み重なりになり、それがはるか沖合まで、延々と続いている。海流の変化がつくりあげたこの乱氷帯が、北極海に面した海岸線を厚いベルト状をなしておおっていて、北極点へ至る最大の難関になっている。犬橇で北極点をめざす者は、だから最初から大きな障壁にぶつかるわけだ。

私は近くにある高さ十メートルほどの氷のブロックによじ登った。高みに立ち、北の方角を眺めて、愕然とした。飛行機の上から何度か観察して、ある程度覚悟はしていたつもりだが、やはり愕然とした。なんというものすごい乱氷帯なのだろう。機上から見た乱氷は、けっしてその正体を見せてはいなかったのだ。いま私の行く手に、ひとつとして同じ形のない大小の氷のブロッ

クがひしめきあっていて、視野の果てまで続いている。薄明の中に濃淡の変化をつけて浮びあがる氷のブロックの堆積は、あまりに圧倒的で、むしろ幻想の中の光景のようだ。どうやったら、こんなすさまじい乱氷の中に犬橇を進ませることが出来るのだろうか。私は寒さを忘れて、数刻のあいだ茫然と立ちつくしていた。

そして、結局、ルートらしいルートを見つけることはできなかった。氷のブロックを降り、また登り、なんとか橇の通れそうなルートを探してみたが、そんなものはなかった。時間は容赦なく過ぎてゆく。ルートはない。ないとすれば、自分の力で氷を砕き、ルートをつくり出していくしかない。数時間歩きまわったのち、飛行機が飛び立っていった場所に戻った。装備の最終点検をする必要もあり、今夜はここに泊まるしかない。

テントを張ってもぐりこんだ。石油コンロに火をつけ、お茶を沸かし、カリブー（北米産トナカイ）の凍肉をかじった。まだこの生肉が本当にうまいと感じられない。極地の生活に身体がまだ馴れていないのだ。それでも食べなければならぬ。明日からのきびしい旅には、強靱な体力が要求される。口の中に入れるとしだいに溶けてくる肉を、無理に胃袋に落としこむようにして食べた。

それから二重のシュラフ（寝袋）の中に身体を押しこんだ。四重張りのテントと二重のシュラフ。それでもマイナス五十度を前後する寒気は、身体全体に不気味に迫ってくる。石油コンロの燃える音、ときおり氷原を巻いていく風の音。寒さと、旅立ちの興奮で、なかなか寝つかれない。

東京を発ったのは一月三十日（日本時間）だった。私を支援してくれる多くの人たちが羽田ま

で見送りに来てくれた。日本でこの冬最低の気温が記録された日で、北海道ではマイナス二十度以下になり、東京でも氷が張っていた。それは私の出発にふさわしい朝であった。

今年に入ってから、資金集めやその他の準備に忙殺され、平均睡眠時間五時間を割る毎日が続いた。頭が朦朧もうろうとしてくると、冷たい水で頭を冷やしたり、夕方になって睡眠に襲われると、自分の頭を叩きながら「こんなことで人に迷惑をかけたらいけないぞ」と、くり返し自分を叱咤激励するのだった。

見送りの人々に別れを告げ、二十時四十分発のバンクーバー行日航〇一二便のシートに腰をおろすと、張りつめていた気持がゆるみ、同時にドッと疲れが出たような気分だった。機内がうす暗くなり、瞼まぶたを閉じると、久しぶりに本来の自分をとり戻すことができるように感じた。

二年前、一年半かかった北極圏一万二千キロの犬橿の旅から帰り、ただちにこの「北極点単独犬橿旅行」と「グリーンランド縦断」の計画にとりかかった。たったひとりで、北極点まで犬橿を走らせる。無謀と言われるかもしれないが、私は一万二千キロの犬橿走行の経験をもとにして、その可能性を検討し、自信を得ることができた。また、そのほとんどの部分に未だ人類の足跡が印されていない世界最大の氷の島グリーンランドを縦断することは、私にとってきわめて魅力的であると同時に、だれかがやらなければならないことだと思った。

しかし、この計画を実現に向けて推し進めていく毎日、私にとってはある意味で惨澹さんたんたるものだった。元来まったく苦手な講演や対談のスケジュールに追われ、人に会ってこの計画を説明し、援助を乞う毎日だった。そうしているうちに、知らず知らず自分が、人並みにもっともらしい言葉を操るようになっていくのに気がついた。人と会って話をすることや、文章を書くことが

かなり苦手である自分が、いつのまにか自分でも調子がいいと思われるほどの弁舌をふるったり、文章を書いたりしているのだった。

だが、これからは違う。これからどんな美辞麗句も通用しない、自分の力だけが頼りの、きびしい自然が行く手にある。言葉はこれから始まる旅にはもう何の役にも立ちはない。

しかし、また一方で、この旅を実現させるために得ることができた多くの人々の援助と好意を、身に沁みて感じないわけにはいかない。今度のような大計画になると、資金的にも、技術的にも、そしてまた精神的にも、多くの人々の協力なしではやり遂げることはできない。私は言葉だけがうまくなったのではないことを自分自身に示すために、いやそれ以上に、多くの人々が私の勝手な行動にかけてくれる期待に応えるために、自分の口から出たこの計画を達成しなければならぬ。達成し、無事に生還しなければならぬ。多くの人々に援助を乞うた以上、それは私の責任なのだ。それを踏みはずしたら、私という人間は無でしかなくなる。

バンクーバーに向かう飛行機の中で、こう決意したことが、この狭くて寒いテントの中で新たによみがえる。そうだ、この圧倒的な乱氷群をまのあたりにして、ひるんでなどいられないのだ。明日からは、なんとしてもここを切り抜けなければならない。——そう自分に言い聞かせながら、旅の最初の眠りについた。

三月六日

朝七時に目が覚め、石油コンロに火をつけ、紅茶を沸かす。イクーサ（デンマーク製の固い乾

パン）にジャムをつけて食べる。夕食の生肉以外、口にする食物は、これだけだ。無線機、コンロ、ナベなどの入った木の箱を外に出す。ぼつてりとした二つのシュラフをたたんでテントの外に出す。中に敷いたカリブーの毛皮も袋状になったテントの入口から放り出す。テントをたたみ、他の装備といっしょに櫓の上に積みあげる。このテントは幅二メートル、長さ二・二メートルで、ちようど柄のない四本骨の傘のような構造をしており、張るにも撤収するにも一分とかからない。狭いが、四重張りなので、石油コンロを焚きさえすれば、内部はたちまち暖かくなる。

櫓の上に積んだ装備類をすっぽりシートで包み、さらにその上にカリブーの毛皮を拡げ、紐でしっかりとしばりつける。カリブーの毛皮を敷いた部分が、ちようど馭者台ぎょしゃだいになるのだ。犬の調子とコースがよければ、私はここに坐ってムチをふるうことができる。だが、この乱氷帯では、当分そんなことは望めないだろう。

私の櫓は、幅九十六センチ、長さ四・五メートル。堅牢であることを主眼として、後部の長柄とランナーは固いカシ材を使い、床板だけ米松べいしょうを使った。ランナーの底部すなわち氷との接触面はプラスチックを貼ってある。

この櫓は、グリーンランドのカナックで、櫓づくりの名人といわれるイッキヤングワに作ってもらった。材木代を入れて二千クローネ（約八万円）かかった。設計や細部の工夫はみな私自身がやって、乱氷に耐えられる頑丈一点張りのものだが、欠点は並みはずれて重いことだ。百五十キロ近い重さがある。

出発しようとする、プレッシャー・リッジ（氷板と氷板がぶつかり合ってつくる氷が盛りあがった部分）の間に、きのうはなかった幅十五メートルほどの黒々とした開水路（オーブン・ウ



トウを使って氷の厚さを測る

オーター」がひろがっている。やむなく、犬と橇を置いたまま、なんとか通れるルートはないかと探しに出かけた。

午前八時から午後二時半まで、乱氷のなかを歩きまわって、結局、西へ二キロほど寄ったところに、沖合へ続く開水路を発見する。これに沿って行けばなんとかなるかも知れない。乱氷の間を氷を割りながら進み、夕方ようやく二キロほど離れた旧氷の上にたどりついた。明日はこのル

ートに犬橇を通そうと決めて、橇まで引き返す。結局、きょうも犬橇を前進させることができなかった。

三月七日

気温マイナス四十一度。南の風。

乱氷のすごいこと、テトラポッドを積み重ねたという形容ではまだ足りない。まるで氷の藪の中にいるようだ。

朝八時に出発するが、とても橇の上に乗っているどころではなく、犬の前に出て鉄棒をふるって氷を砕き、ルートをはひらきながら進まなければならぬ。エスキモーがトウと呼ぶこの鉄棒は、グリーンランドのカナックの村でエスキモーから手に入れたものだが、犬橇の旅にはなくてはならないものである。

エスキモーの獵師たちは、この鉄棒を獵に出るときかならず持つていく。長さ三メートルほどで、両端がとんがり、真ん中の部分に刀の柄のように布と紐を巻いた握りがついている。

マイナス四十度を越え、午後になると激しい地吹雪が舞い上がった。ブリザードの中でも、鉄棒をふるう私の全身は火のように熱く、背中は汗でぐっしょり濡れる。鉄棒をふるう手を休めると、たちまち背中が凍りつき、いいようなない寒気が襲ってくる。長いあいだ、私は一個の碎氷機と化して働いた。くたくたに疲れ、午後三時、幕営する。空しさが心をかすめるのをどうすることもできない。なにしろ、出発点のコロンビア岬はまだすぐ後ろに見えているのだ。直線にしたら二キロしか進んでいないことになる。

テントを張っても、休んではいられない。夕方五時から一時間半、また付近を偵察に出かける。十メートル以上もある氷丘の上に這い登って、行く手を見たが、乱氷は累々と続き、それを眺めると、いっそう私の疲れは増すばかりだった。あせるな、地道に、着実に氷を砕くしかここを突破する方法はない、と自分に言い聞かせるのだが。

三月八日

吹雪。気温マイナス三十一度。西の風十五メートル。

強風のため行動できず、一日停滞した。出発してから犬橇の実働はまだ一日である。それも海岸から歩いても二時間とかからない目と鼻の先にいるのだ。

北極海の氷が悪いことは、これまで記録を読んだり、人に聞いたり、また自分でも昨年の四月、飛行機をチャーターして偵察し、ある程度わかっていたつもりだが、実際にそれを目前にすると、

氷の規模の大きいこと、それに雪の深いこと、いずれも前回の一万二千キロの旅のときの比ではない。海岸に押しあげられた氷のブロックには、氷河のモレーン（堆石）のように二十トンも三十トンもありそうな巨大なものもある。氷と氷がぶつかり合って、二重三重に重なり、また割れて瓦礫^{がれき}の山のようになっているとどこもある。いたるところに峨々^{がが}たる氷丘が続き、尖った氷板がぶつかり合っている。

しかも、それらの氷は、絶え間なく、少しずつ移動をくり返している。夜、テントの中で耳を澄ますと、氷のきしむ音がひっきりなしに聞える。朝起きてみると、前日あらかじめ切りひらいておいたルートが、いつの間にかふさがれていたりする。眺めているだけなら、こんなに美しいものはめったにないと思う。おそろしいほどの氷の蒼さ。千変万化の氷群の姿。しかし、犬糧を走らせるとなると、これほど厄介なものはない。私は美しさに見とれつつ嘆き、嘆きつつ見とれる。

午後三時ごろになって風がやんだ。二時間ばかり偵察に出かけ、帰ってくると、犬が大喧嘩をしていた。一頭が耳を噛まれ、血だらけになっている。その血が凍って頭にこびりついている。もともとこの犬たちは寄せ集めの犬で、仲が悪く、喧嘩が絶えなかったのだが、そこへもってきて、どうやらメス犬の一頭が発情したらしい。争いが一段とひどくなっている。メス犬だけ別のところにつないでやる。

夜、テントの支柱にアンテナを張り、無線でアラート・ベースを呼び出す。二十分間の交信に成功する。感度良好。こいつは心強いかぎりだ。